

○人のドイツ人グループが、「母国にもたらされた」。一九四〇年のクリスマスまでにこれらの民族グループの「帰還」は終了し、四一年二月には、ベッサラビア・ドイツ人の入植がはじまった。⁽²⁵⁾

(2) ヒムラー秘密覚書——「指導者なき労働民族」ポーランド人

ドイツ民族至上主義の現実への適用として、併合地域において以上のような諸措置が進行する。他方で、併合地から排除されて送りこまれてくるポーランド人・ユダヤ人の処理が、総督府にとっては難題となる。⁽²⁶⁾ さしあたりの占領地ポーランドで、総合的にこの課題をどのように遂行していくべきかを構想しなければならなくなったヒムラーは、一九四〇年春、「東部における非ドイツ諸民族の取扱いに関する若干の考え」なる覚書をまとめた。⁽²⁷⁾

この覚書は、五月二五日の土曜日、ヒトラーに提出された。ヒトラーはこれを一読し、「非常によくできており、正しい」と高く評価した。そして、内容のあまりの露骨さのゆえに秘中の秘とすべきであると判断したヒトラーは、わざわざ、「コピーはほんのわずかのみとすべきであり、けっしてプリントしてはならず、完全に秘密に取り扱うように」と、ヒムラーに指示した。⁽²⁸⁾

公になった場合、占領地支配に困難をもたらすようなその構想の露骨さとはなにか。ヒムラーによって東部ガウのガウライター、コッホ、フォルスター、グライザー、総督府長官フランクなどごく少数の指導部に対してのみ、ヒトラーによって承認され称賛され、したがって、正統化された「指針」として開陳されたこの極秘覚書は、つぎのようにいう。

「東部における非ドイツ人諸民族の取扱いに際しては、できるかぎりたくさん個々の民族を識別し、対処するようにならなければならない。すなわち、ポーランド人とユダヤ人のほかに、ウクライナ人、白ロシア人、ゴ

ラル人、レムケ人、カシューブ人といったものを識別するように気をつけなければならない。これ以外にどこかほかに民族の碎片がみいだせるときは、これらと同じようにしなければならぬ。

私がここで言いたいことは、われわれが東部の住民をひとまとめにすることに関心があるのではなく、むしろその逆に、可能なかぎりたくさん部分とかけらにバラバラにしてしまうことに最大の関心がある、ということなのである。

しかしそれだけではなくて、これらの個々の民族自体の内部においても、われわれは、それを統一させたり大きくさせたりするのではなくて、つまり、彼らに民族意識や民族文化を漸次的にもたらしたりするのではなくて、むしろそれを無数の小さな小片や粒子に砕いてしまうことに、関心をもつのである。⁽²⁹⁾

これは、さきにみたような自民族強化策の見地、すなわち「人種的・精神的・民族的・政治的」に一致団結した強大なドイツ民族（「民族同胞」、「民族共同体」なる内的な水平的統合理念を核として）をつくりあげるといふ建設的・積極的目標を背後に堅持したうえで、ポーランド人をはじめとする東欧諸民族をバラバラのできるかぎり小さな民族的碎片に解体し、弱体化させることを、明確に表明したものにほかならなかった。これら諸民族の扱いは「分断して統治せよ」の階層秩序的な適用であった。ゴラル人、マズール人といった少数民族、そして総督府に当初六〇万人から七〇万人いたウクライナ人は、「スラヴの劣等人種」と軽蔑したポーランド人よりもいくぶん寛容に取り扱った。とくに最初、ウクライナ人については、この段階での不可侵条約の相手であるソ連のことを配慮して相対的に優遇した。⁽³¹⁾ それはまた、ポーランドの「カトリック教徒の団体がユダヤ人との協働のために活動している」といった対抗的努力、ポーランド民衆のなかで「反ユダヤ主義が後退した」といった現象、⁽³²⁾ すなわち、宗教的にも多様な被抑圧諸民族の連帯と統合の気運や努力を粉碎しようとするものであった。

ポーランドの代表的研究は、ヨーロッパ・ユダヤ人のなかで最大規模の被害者であるポーランド・ユダヤ人の問題を考える視角と関連して、その点をつぎのようについて、ポーランド住民の一部分であるユダヤ人の運命は、大きなヨーロッパ的なユダヤ人の悲劇の一部分であるが、同時に、占領されたポーランドの歴史の総合的な状況の一部に属する。多くの研究ではこの関連性が認識されていない。このことは疑いもなく、ドイツの占領者がポーランド人とユダヤ人を広範囲にわたって相互に孤立化させた、という事実⁽³³⁾に由来している。この見方は、本書と立場を同じくする。すなわち、多くの研究は、占領者がその支配の諸目的からして一般（キリスト教）ポーランド人とユダヤ人を峻別したことの意味を認識していないという彼の批判について、共鳴するものである。

ともあれ、ヒトラーの考えには、**バラバラの東欧諸民族を無知蒙昧で従順な労働奴隷として支配下におき、その最底辺に、労働奴隷としての役割さえも否定して支配下の地域から排除すべきものとして「少数民族」⁽³⁴⁾ユダヤ人を位置づける、という諸民族の階層的序列化の理念なし構想があった。**人はたとえ労働奴隷であっても、追放され迫害されるユダヤ人よりはまだまだましである、ということになる。そして、この諸民族の階層的序列化とその全構造のドイツ民族による支配という理念こそは、状況の変化や支配領域の拡大と縮小にともなう諸民族の取扱いの変遷にもかかわらず、ヒトラー、ヒムラーなどに一貫していたことであった。その意味で、ヒトラーやヒムラーの発想を、単純な東方民族絶滅論と規定するのは、彼らの思想（ドイツ民族主義）の動態的な基本的構造を見落とすものであろう。⁽³⁵⁾

ヒトラーの『わが闘争』（公刊されてはいるがあまりきちんと、とくに批判的、分析的には読まれない）から、『政治的遺言』（秘密）にいたるまで一貫している手法から明らかのように、**諸民族の階層的序列の最下位にユダヤ人（ユダヤ民族）を位置づけ、特別扱いすることは、逆にいえば、社会の諸矛盾、戦争その他、すべての悪しきもの、みずから（ドイツ民族主義）の生存上のすべての危険、みずからに敵対するものすべてのものの生みの親、原**因、主導者などを、ユダヤ人（民族）ないしユダヤ人（民族）の影響下にあるものとするものである。それは、諸民族・諸国家からなるヨーロッパのキリスト教的伝統の社会にひそむ、反ユダヤ感情・反ユダヤ主義という共通項の摘出であり、それによって水平的統合の武器を鍛え直すことであった。**「ユダヤ人はヨーロッパから出ていかなければならない。われわれがそうしなければ、ヨーロッパの和解は達成できない」**⁽³⁶⁾と。

ドイツを頂点とするヨーロッパの垂直的統合が基軸である。そのヨーロッパ新秩序の前衛としてのドイツ民族主義のもろもろの敵・敵対的な諸要因・敵対的な諸勢力を、階層的に序列化し、最頂点に、あるいはそのもっとも極端なもの、最右翼にあるものとしてユダヤ人（民族）を位置づける。この部分だけを切り離してみれば、ヒトラーの最大・究極目標が、ユダヤ人迫害・ユダヤ人問題の「最終解決」（ヨーロッパ世界を「ユダヤ人問題から最終的に解放」という大義名分）にあったかのような外観、つまりは転倒した外観が生じる。そして、この表面的な外観に、多くの研究者、歴史解釈がいまなお幻惑されているだけでなく、当時⁽³⁷⁾にあつては、ヒトラー・ナチスのユダヤ人攻撃の外観的・非本質的現実⁽³⁷⁾に多くの民衆が幻惑させられたのであつた。

ともあれ、無知蒙昧で従順な労働奴隷の創出のために、**「東部の非ドイツ人住民には、四年制の国民学校以上の高等な学校は与えてはならない。**そして、この国民学校の目標は、たんにつぎのことではなければならない。すなわち、せいぜい五〇〇までの数を数えられる簡単な算数、名前が書けること、ドイツ人に従順で、正直で、勤勉で、そしておとなしいことが神の掟だ」という教え。読むことは、私には必要ないと思われる」と、ヒムラーはいう。⁽³⁸⁾

ユダヤ人を階層序列の最底辺におき、排除することについては、ヒムラーはつぎのようについて、「ユダヤ人という概念自体が、**全ユダヤ人をアフリカへ大規模に移住させ、その残りはひとつのコロニーに移住させるという可能性によって、完全に消え去ってしまうのを見たいと望んでいる**」⁽⁴⁰⁾と。

ドイツ民族が、諸民族の階層的序列を上から下に串刺しにして、全体として支配・統治することが基軸目標であ

ドイツ第三帝国の ソ連占領政策と民衆 1941—1942

永岑三千輝 著

